

ユニセフと助産婦さん

和気 邦夫

ユニセフ駐日事務所所長

僕は助産婦さんが大好きだ。こんな出だしで文章をはじめると読者にごますりをはじめたと思われるかもしれないが、わたしの助産婦とのつきあいは長かった。第二次世界大戦の真っ只中の昭和18年おやじの勤めていた東芝の工場のあった川崎で生まれた。母親の話では家でお産婆さんの手に助けられながらこの世にでてきたそうである。幸い安産でよかったが、当時のお産婆さんにどの程度の科学的知識があったかは、ちょっと気になる点である。食料不足の時代にもかかわらず、母乳でまるまると良く育ったようで、母親もそのことを誇りに思っていたそうである。

それから27年がたちユニセフにはいり、インドのニューデリーに勤務になった。当時のインドでは看護教育も整備されていない時代で、ユニセフはWHO(世界保健機関)といっしょに1年間の助産婦教育を援助していた。通常の看護教育を終ってからもう1年の助産婦コースということで、生徒にとっても大変だったと思うが、北部インドにある看護学校を見て歩き、教授陣がそろいカリキュラムがしっかりすると、ユニセフから教材や医療器具を学校にさしあげた。そして卒業生には一人ひとり、卒業証書といっしょに安全な出産をたすけるのに必要な新しい器具と衛生材料がはいっているアルミ製の持ち運びのできるケースを全員にさしあげたのを思い出す。

1980年代は、ユニセフの努力は訓練を受けていない「取り上げ」の教育に向けられ、私がユニセフ代表をしていたパキスタンでも、村々から「取り上げ」を集めて保健所で3か月の特訓が大規模に行なわれ、2,3千人の通常TBA(Traditional Birth Attendant)といわれている無資格助産婦の訓練を援助した。絵入りの教材をたくさん作ったり教

育内容を改善したり、これは大きな事業であった。

先月大阪で「日本母乳の会」の年次総会に出席し日本の現代の助産婦さんたちに初めてお目にかかる機会があった。みんな若く大変熱心に講演を聞いている姿と母乳育児に関する本をたくさん購入している姿が印象に残っている。日本の助産婦さんは勉強家で仕事に誠実なのだろうと思った。

病院はますます大きくなって官僚的になるが、助産婦さんたちはいつまでも赤ちゃんにやさしく、おかあさんにもやさしく母乳育児をたすけてあげてほしいと願っている。

さて、ユニセフは、母乳育児推進のために、WHOとの共同声明を発表している。「母乳育児成功のための10カ条」である。もう、皆さん、すでにご存知と思うが、改めてご紹介させていただく。

母乳育児成功のための10カ条

1. 母乳育児の方針を全ての医療に関わっている人に、常に知らせること
2. 全ての医療従事者に母乳育児をするために必要な知識と技術を教えること
3. 全ての妊婦に母乳育児の良い点とその方法を良く知らせること
4. 母親が分娩後、30分以内に母乳を飲ませられるように援助すること
5. 母親に授乳の指導を充分にし、もし、赤ちゃんから離れることがあっても、母乳の分泌を維持する方法を教えてあげることに
6. 医学的な必要がないのに母乳以外のもの、水分、糖水、人工乳を与えないこと
7. 母子同室にすること。赤ちゃんが母親が1日中24時間、一緒にいられるようにすること
8. 赤ちゃんが欲しがるときに、欲しがるままの授乳をすすめること
9. 母乳を飲んでいる赤ちゃんにゴムの乳首やおしゃぶりを与えないこと
10. 母乳育児のための支援グループを作って援助し、退院する母親に、このようなグループを紹介すること